



五時限の夢



ヤマダヒフミ

私は夢の中で眠っていました。・・・私は、夢の中で、机に突っ伏して、眠っていました。そして、夢の、そのまた夢の中で、私は恐ろしい夢を見ていました。私はそこでは暗い中を、どんどんと落下していくのです。・・・そして、その底には、人間の骨ばかりが沢山詰まっている・・・。骨は見えないけれど、何故だか、そう「感じた」のです。私は。

私はどんどんどんどん深く落下していきました。私は怖いような、不安なような、それでいてどこかそれを愉しんでいる私もどこかで、落ちていく私を見ているような・・・そんな不安定な気持ちでした。私は、ただひたすらに落ちて行きました。

そして、落ちる程に、底が見えて来ました。・・・それは私が思ったとおり、やっぱり、人間の骨で埋まっていた。ああ、私はあそこに落ちて、激突して死ぬんだ・・・私はそう感じました。それは、もう、間違いのない事実でした。

ですが、地面が近づくにつれ、私は、妙な事に気が付きました。その、骨だらけの地底の真ん中に、何やら、赤いものが見えるのです。・・・それは、私が落下すればするほどに、どんどんと大きくなっていきました。はじめ、私はそれが、置いてある袋か何かだと思いましたが、段々に、それが生き物だという事に気が付きました。・・・それは、どんどん大きくなりました。私が落下するたびに。・・・それは、なんだか、その体が膨らんでいくようでもありました。

私は落下していきました。そして、丁度私は、その赤い生き物に吸い込まれるように落ちていったのです・・・。そして、その赤い生き物が何なのか、私にもはっきりとわかってきました。・・・それは鬼でした。顔は馬みたいに細長いのに、体は筋骨隆々とした人の体、そして手には棍棒を持っていました。どうして、私がそんなにはっきりとその姿が見えたのか、それはわかりません。・・・本来、上からは、その全身が見えないはずでしたのに。

私は、その赤い馬の化け物に吸い込まれてゆきました。そいつは、私に気がつくや、口をあぐりと大きく開きました。・・・すると、その口はみるみる、その地底一杯に広がりました。・・・そして、その口の中は真っ暗で、そして、何故だか、その真っ暗の口の奥には何人かの泣き叫ぶ赤ん坊の姿が見えました。・・・そして、その何人かの赤ん坊の姿は、互いにどろどろにくっついていて、そして、みんな何故だかも、必死に、私の方に向かって泣き叫んでいるのです。

私は、恐ろしくなりました。心底、怖かったのです。こんな事になるのなら、もっと早いいつかの時期に、死んでおけばよかったと思いました。・・・私は落下して行きました。その黒い口の中に。赤ん坊達の群れの中に、私の体は突入して行きました。・・・そして、私が、ああ、もう駄目だ、と、心底諦めて、目を瞑った瞬間、ふいにどこからか光が現れ、強烈に私の目を焼きました。・・・そして、次の瞬間、私は目が覚めていました。

それは、授業中の事でした。・・・私はいつもはしない居眠りを、昼休み後の英語の授業に、机に突っ伏して、眠ってしまっていたのでした。・・・そして、私の顔の辺りには、ちょうど、カーテンの隙間から漏れた光が、厳しく突き刺さっていました。・・・私は、内心の動揺と、私が今までぐうすか寝ていた事を周りに気取られないように(もちろん、周りの人達はみんな気がついていでしょうが)、教科書をこれみよがしに広げて、その中に自分の顔を隠しました。・・・でも、私の心臓はバクバクと鳴っていました。私は、怖くてしかたなかったのです。・・・でも、それと同時に、私は、自分がこの、現実に戻ってきた事に安堵していました。私は、もう二度と、あんな夢は見なくなかった。だから、もう二度と、学校では居眠りしまいと、その英語の時間に、こっそりと誓いました。

・・・でも、事はそれで終わりじゃなかったのです。私はその日の帰り、いつも通り、友達のゆうちゃんと一緒に帰っていました。ゆうちゃんはおとなしくて、引っ込み思案な子でした。・・・だから、私とはいつも気が合うのでした。

・・・でも、その日の帰り、ゆうちゃんは私と一緒に帰りながら、少しだけ様子が変わったのを、私は覚えています。・・・ゆうちゃんは、一緒に帰りながら、私がいつものようなちょっとした世間話や、面白そうな話をして、いつものように明るく優しく相槌を打ったりはしてくれませんでした。ゆうちゃんは珍しく――というか、私が一度も聞いた事がないくらいに、低い声で、私の話に「うん」「そうだね」と、答えるくらいなものでした。

それを、私は最初は気が付きませんでしたけど、帰り道を十分ほど進んだ所で、その異変に気が付きました。・・・私は、彼女の事を思って、声をかけました。

「ゆうちゃん、大丈夫？風邪でも引いているの？」

・・・すると、ゆうちゃんは、私の方とは逆の側を見て、ちょっとうつむきました。・・・そして、それっきり、何も答えようとしません。私が心配になって、もう一度、ゆうちゃんに声をかけようとするや、ゆうち

ゃんはまるで、私の言葉に覆いかぶさるように、次の言葉を言いました。

「ねえ」

それは、とても低い、男の人のような声だった事を覚えています。

「私達はみんな、見てみぬフリをして、生きているのかしらねえ」

・・・それは、私にとっては意味不明な言葉でした。それに、普段のゆうちゃんからは考えられない口調と、言葉だったので、私はその時、呆然とそこに立ち尽くしました。ゆうちゃんは、また言葉を発しました。

「あの赤ん坊達だって、きっと、とても苦しんでたのよ・・・。あなた、その事に気づいた・・・？」

そう言って、ゆうちゃんは、ヌツと、私の方を見ました。私の方に、さっきまで見えなかった顔を向けました。・・・、私はその顔に驚きました。それは、まるで人間の顔ではありませんでした。でも、確かにゆうちゃんと分かる顔形も残っていたのです。つまり、それはゆうちゃんの顔から、もっと、別の薄気味悪い化け物の顔へと、ブクブクと音を立てながら、変わっていく途中だったのです。

私は絶句しました。何も言えませんでした。逃げる事も、叫ぶ事もできませんでした。・・・その時、私は気が付かず、後で気がついた事でしたが、周りの光景がさっきまでと違っていました。確かに、そこは私達のいつもの帰路の途中だったのですが、その周囲には私達以外の人の姿は見当たらず、そして、ゆうちゃんの後ろの夕陽は、今まで見た事がないくらいに真っ赤になっていて、しかも、とても大きかったのです。それは、ゆうちゃんの顔よりずっと、大きく見えました。

何も言えない私に、化け物になりつつあるゆうちゃんは、言葉を続けました。

「私達は、何も見ずに生きている・・・。何も見ずに感じている・・・。でも、あなた、わかった・・・？。落下の瞬間、とても怖かったでしょう？(そう言って、ゆうちゃんはニンマリと、赤黒く笑いました。)ここに戻ってこれた時、さぞ、ほっとしたでしょう？・・・。でもね、私達、忘れていた。私達みんなが、落下し続けているという事に。」

そう言い終えた時は、ゆうちゃんは、もう背丈二メートルくらいの、完全な化け物になっていました。・・・そして、その姿は、私が丁度、あの夢の中で見た、あの馬の顔をした化け物と全く同じだったのです！

「あなた・・・わかっている？・・・私達は忘れていた。私達は、あの子どもたちの叫びを、忘れていた。あの、底に埋まった沢山の骨も忘れて生きているの。私達が落下し続けて、生きている事も。そして、あの子供を、あの骨を作り上げたのが、私達自身だということも、私達は忘れていた。忘れたの。私達は全部。そう、忘れたのよ・・・だから、こうして」

そう言って、ゆうちゃん――いいえ、もう、その鬼のような化け物は、どこから取り出してきたのか、あの長い棍棒を両手に持って、高く掲げていました。それで、私は今にも、打ちのめされ、死に絶えようとしているところでした。私の体は、ピクリとも動きませんでした。

「全てを思い出させる為に、何もかも全て、私達がした事を、私達に全て、思い出させる為に、私はこうやって、みんなの所をまわって活動しているのよ。私達は、死に飢えているわ。自分達が、沢山の人を、いじめて、いためつけて、殺してきたのに、その事を忘れようとしているから、私はこうして、あなた達に、死というものを思い出させてあげるの。その為に、私のような化け物は存在しているの。・・・だから、まず、あなた。可愛いあなたから、殺してあげる。それで、たっぷりと、自分のした事を思い出して♥」

・・・その馬の化け物の最後の声は、変な事ですが、本当にチャーミングな声でした。可愛らしい口調でした。・・・もちろん、その時の、私は伽藍堂で、この世界も私自身も全てが空っぽになっていて、目の前の怪物が一体、何なのか、なぜ、私を殺そうとしているのか、全然わかりませんでした。

・・・私はまた、目をつむりました。今から死ぬのだ、とも、もう何とも思いませんでした。・・・ただ、反射的に目を閉じていました。ただ、私の魂の奥深い所では、死というものはっきりと実感していました。言葉にならなくても、私はもうほとんど「死」に触れていました。

そして、棍棒が振り下ろされてきました・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

※

私は目が覚めました。・・・今度こそ、本当に目が覚めたのです。・・・そこには、棍棒を持った馬の化け物の代わりに、教科書を持った、英語の先生が立って、私の顔をのぞきこんでいました。・・・先生は、その英語の教科書で、今にも私を小突こうとしているところでした。その刹那に、私は、はっと目を覚ましたというわけでした。

「起きたか」

と、先生は少し厳しめな声で言いました。

「はい」

と、私は放心状態で言いました。ここがどこかさえ、ほとんどよくわからなかったぐらいでした。

「珍しいな。お前が居眠りなんて。・・・これからは気をつけるように」
・・・そう言って、先生は教壇の方へ戻って行きました。周りのクラスメイトはみんな、くすくすと笑っていました。

その日以来、私は、学校で居眠りした事はありません。